



町長エッセイ



「日本の手漉和紙技術」としてユネスコ無形文化遺産に登録された「石州半紙」「本美濃紙」「細川紙」の関連7団体が一堂に集まり、第2回和紙サミットが7月1日・2日小川町と東秩父村を会場に開催されました。

「和紙文化を地域活性化につなげるために」をテーマに、第1回の開催地「石州半紙」の浜田市長からは伝統芸能の石見神楽を支える和紙の紹介があり、「本美濃紙」の美濃市長からは23年前から続く美濃和紙あかりアート展で幻想的な世界を醸し出している和紙の報告がありました。

小川町としては、来年、70回と歴史を重ねる小川町七夕まつりを紹介しました。和紙の一大産地であった小川町も、戦後は、洋紙の導入や機械漉き和紙の台頭で手漉き和紙は窮地に追い込まれました。この時、「和紙の町小川復活」の願いから七夕まつりが始まりました。

ユネスコ和紙展の会場のひとつである町立図書館では、往時の和紙による七夕まつりを再現し、和紙サミットの参加者を歓迎しました。それらの飾りは7月22日・23日に開催された第69回小川町七夕まつりでは更にバージョンアップして飾られ、小川祭りばやしや子どもみこし、そして一大花火大会などとともに、沢山のイベントに訪れた多くの観光客に楽しんでいただきました。

松本恒夫